

終戦の日特集

平和について考えよう

総務課広報情報係 ☎ ②⑤ 1114

太平洋戦争終結から 69 年

1945年8月15日正午、昭和天皇による「終戦の詔書」の朗読放送（玉音放送）により、連合国への日本国の降伏が国民に知らされ、多くの尊い命が犠牲となった太平洋戦争が終わりを迎えました。そして、現在に至るまでの戦後 69 年間、日本国憲法の下で日本は戦争を放棄して平和を維持し、また経済的にも先進国の仲間入りを果たし、私たち日本国民は平和と豊かな暮らしを手に入れることができました。

しかし、今もなお世界各地で戦争や紛争が無数に存在し、多くの尊い命が失われ続けています。国家間や地域間における戦争や紛争、またそれらを誘発する大きな要因とも言える貧困や差別、抑圧といった社会構造による暴力に対して、唯一の原子爆弾被ばく国の国民である私たちはどのように考え、行動していくべきなのでしょう。

8月15日終戦の日、戦没者を追悼するとともに、平和について考えてみませんか。

今回は、終戦の日特集として、安楽島町の宮濱浅次郎さん（89 歳）に戦争の体験を聞かせていただきました。

支え合ってたしのいだ 戦時中の暮らし

当時は、国民教育というか、軍事教育というか、戦争は当然のこと、絶対勝つんだというような教育でしたので、食糧が不足したり不味かったりしても、耐え忍ぶということが当たり前の時代でした。米は配給制度でしたし、食糧事情は良くはありませんでした。勤務先に持って行く弁当は、半分以上はサツマイモが入った芋飯だったと記憶しています。少しでも畑のある人は芋を作ったり、麦を作ったりしていましたが、農業ができなかった家は大変だったと思います。ただ、安楽島の場合は冬場にボラ・コノシロの建網漁があり、魚も捕れ少しは恵まれていたので、みんなが助け合って、協力し合っ



安楽島町 宮濱 浅次郎さん

てなんとかしのぐということができていました。

戦地へと旅立った人々

2人の兄が戦地へ赴き2番目の兄が沖縄で戦死しています。戦死した兄と同じ年ごろの村の人たちは、ほぼ全員が出征し命を落としました。安楽島では24人のかたが亡くなっています。出征した年代の人たちはとても優秀な人材が多かったのですが、もし戦死することなく村に残っていた活躍していたら、安楽島はどうなっていたらと考えることもあります。

爆音と震える大地

安楽島では各戸で防空壕を作っていましたが、実際にB-29爆撃機などによる空襲被害はほとんどありませんでした。もしあったとしても、この辺りにある防空壕では何の役にも立たなかったと思います。

空襲警報が鳴りB-29が飛び去ったあとは、必ず艦載機が飛んできました。伊勢方面の空に焼夷弾が雨のように降り注いでいたのを見た記憶があります。また、相島（あひしま）現在のミキモト真珠島）では停泊中の艦船が艦載機の攻撃を受

平和の大切さを 知ってほしい

沖縄の小学1年生の少年が綴った詩『へいわってすてきだね』が沖縄慰霊の日に合わせて絵本になったことを知った、小浜町在住の石原一宏さんから7月8日に市内小学校と図書館にその絵本10冊が寄贈されました。

石原さんは、父親から聞いた戦争の話から平和への思いが強く、子どものときにこのような本を読んでもらいたいと寄贈を決めたそうです。

斎藤教育長は、「自分ができることからやっていきたいと結ぶこの詩のように、子どもたちには平和への思いを受けとめてほしい」と感謝を述べました。



石原 一宏さん（写真右）

■特攻兵器 震洋



震洋は、太平洋戦争で日本海軍が開発・使用した特攻兵器。小型のベニヤ板製モーターボートの船内艇首部に炸薬を搭載し、搭乗員が乗り込んで操縦し、上陸船団に体当たり攻撃する。末期は敵艦船の銃座増加に伴い、これを破壊し到達するために2発のロケット弾が搭載された。

搭乗員は、他の特種兵器から転出となった搭乗員のほか、学徒兵、海軍飛行予科練習生出身者を中心とした。彼らは機体が無いために余剰となった航空隊員だった。震洋の戦死者は2,500人以上である。

(画像)

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
(2014/01/28 08:50 UTC 版)

入隊と終戦

1945年8月1日に航空通信兵として入隊し、斎宮の通信隊で3日間を過ごした後、

け、たくさんさんの海軍兵士が亡くなり、安楽島に遺体が運ばれてきたこともありまし。終戦前の6月から7月ごろ、赤崎にたつた1発の1トンとされる爆弾が落とされた時は、地震かと思うくらいのは、地震かと思つた。対岸の家々では窓ガラスが全て割れるといった状況だったそうです。終戦に近づくとつれ、米軍の攻撃は激しくなつていきまし。た。

本隊がある東京の杉並第二小学校に移動して教育・訓練を受けていました。やはり体罰もあり、小銃に土がついていたりすると、班長に2発、3発と殴られて、同じ班の約25名全員が連帯責任でビンタを食らうといった感じでした。それでも、班長は元々学校の先生で、優しい班長だったと思います。

言葉が出る間もなく、8月16日に除隊の命を受けました。軍隊生活とはいふものの、約2週間ほど学校の教室で過ごして除隊となったわけ。安楽島に駐屯した海軍と陸軍の兵隊

安楽島にも基地があり、陸軍、海軍の兵隊が駐屯していました。海軍のほうが待遇がよく、海軍の兵隊は民家に宿泊し、陸軍の兵隊は小学校(※現在の安楽島保育所の場所にあった)や田小屋のようなところに寝泊まりしていました。また、陸軍の兵士は海軍の残飯を食ふというような差がありました。

安楽島に駐屯していた20歳そこそこの海軍の兵隊は、皆、アマガエルに乗り込む特別攻撃隊員でした。陸軍の兵隊より待遇がよかったのは、そういう事情があったからなのかもしれないと、今になって思います。やがて終戦を迎えたため、実際には特攻は行われず、幸い安楽島にいた海軍の兵隊は命を落とさずに済みました。

戦時中は当たり前で、何の疑問も感じなかったことも、今思えば、ばかげたことだったなあと思うことがたくさんあります。

「原爆と人間展」

市立図書館
☎ 4555

市立図書館では、「原爆と人間展」のパネル展示を行っています。ぜひお越しください。

期間 8月31日(日)まで

